

第 11 回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 11 月 23 日（水）午前 9 時 30 分～午後 0 時 30 分

2 場所 伊那市生涯学習センター（いなっせ） 701 研修室

3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
笠原 伸二副委員長	川島 一慶委員
小坂 樫男委員	丸茂 貴子委員
岡庭 一雄委員	関 哲夫委員
小林 辰興委員	北原 秀樹委員
小口 武男委員	藤本 功委員
北原 曜委員	

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

皆さん、おはようございます。本日はお忙しい中、時間を割いてお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。それでは、委員長さんよろしく願いいたします。

（池上委員長）

皆さん、おはようございます。お休みのところを、ご出席をいただきましてありがとうございます。それでは、ただいまから第 11 回の推進会を開催いたしたいと思います。よろしく願いします。

最初に、県の教育長丸山さんがお越しでございますので、冒頭にごあいさつをいただきたいと思います。よろしくどうぞお願いいたします。

（丸山教育長）

皆さん、おはようございます。今、ご紹介いただきました県の教育長丸山愧と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

推進委員の皆さま方には、お忙しいところ、しかも今日のように休日の多い委員会にご出席をいただきまして、本当にありがたく感謝をしております。またそれぞれのお立場から、慎重かつ精力的にご審議を進めていただいておりますことに、改めて感謝申し上げる次第でございます。

ただいま県の教育行政は、高校改革プランを始めとしまして、幾つかの大きな課題を抱えております。県民各位のご理解ご協力をいただきながら、これらの課題に取り組んで、信州教育の発展のために、微力ながら努力して参りたいと思っておりますので、お力添えをよろしくお願いいたします。

特に高校改革プランにつきましては、生徒数の減少によって学校の小規模化が進み、学習活動あるいはクラブ活動などに、教育活動全般にわたっての活力低下が懸念されておりますことから、各学校が一定数の規模の生徒を確保して、生徒の多様なニーズに対応した質の高い教育を提供していくために、高校の再編整備が必要であると認識しているところ

でございます。

県教育委員会といたしましては、この12月末ころまでに、検討結果についてご報告をいただきますように、お願いをしているところでございます。その後、推進委員会からのご報告を考慮させていただき、本年度末をめどに県教育委員会として、高校改革の実施計画を策定して参りたいと、考えているところでございます。

いろいろ難しいご審議でございますが、ぜひお力添えお知恵を拝借いたしまして、高校改革を進めて参りたいと、このように考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは、今日は重要なところを議論させていただきますが、その前に事務局から報告がございますので、よろしくお願いいたします。

(野村主幹教育支援主事)

それでは、資料説明の前に、他の推進委員会の様子についてお伝えしたいと思います。

前回10回、第三推進委員会が10回を数えた後に開かれたものにつきまして、ご報告申し上げますが、第一推進委員会におきまして、その第10回においては、第1区、第2区について集中的な議論が行われました。その中で、中野市に総合学科高校を配置する方針が確認されました。飯山市内の高校には、将来的に1から2校に統合すべきという意見が出されました。

第11回においては、検討の参考にするために、地域の団体等からの提案を募集し、14団体からの提案についてご発表いただきました。発表者に委員からの質疑もあり、意見交換が行われました。

第二推進委員会であります。第10回においては、総合学科の配置について議論がなされ、その中で転換していく環境が整っていること、地元や保護者の期待もあることから、再編整備候補案に上げられた丸子実業高校を、総合学科に転換していくことが合意されました。望月高校関係者から提出された対案の扱いについても意見が出され、期間を区切って、地域からの提案を募集し、併せて検討の参考にしていくこととしました。

第11回におきましては、地域からの再編整備にかかわる提案を募集したところ、応募が4件あり冒頭で報告がされました。会議においては多部制・単位制について集中的に審議し、多様な生徒のニーズに対応することや、進学対応型等新たな取り組みの可能性もあり、第2通学区へ設置していくことを確認いたしました。

第四推進委員会であります。第10回においては、個別の論議を行い、生徒数の減少やこれまで議論してきた学校規模の論理を踏まえると、将来的に2から3学級で第10区の3校以上は無理であり、再編が必要であることを再確認いたしました。このときには一定の結論を得るには至らず、次回において引き続き審議することといたしました。

第11回には、引き続き第10区の議論を行いました。将来的な生徒数および減少した場合の一定規模の学級数確保から、何らかの再編はやむを得ないとの点を再確認いたしました。木曽高校と木曽山林高校について、両校をジョイント的に統合することで合意いたしました。その際、林業大学校との連携のあり方について、今後研究を深めていくことも確

認されました。

第12回であります、第12区の個別論議を行いました。委員長が作成した資料などを元に、まず学校数を4校から3校にする大北地域の再編について審議いたしました。賛成意見が多く出されましたが慎重論もあり、次回以降引き続き審議することとなりました。

また白馬高校の将来像について、その魅力づくりも含め、さまざまな角度から審議いたしました。以上が他の推進委員会のご報告でございます。

次に、11月11日に開催されました、上伊那高校PTA連絡協議会の高校改革プラン学習会についてご報告いたします。

伊那市民会館におきまして、11月11日に開催されまして、名称は「高校改革プランを考える上伊那学習会」ということですが、300名余りの方が参加されました。

県教育委員会事務局から、高校改革の必要性、第3通学区再編整備の必要性、現在までの経緯を説明した後、池上委員長さんから、第三推進委員会の構成委員の任期、予定、検討内容、検討経過、現在までの至った結論、今後検討される事項について説明されました。

その後、意見発表が行われ、駒ヶ根工業高校教諭から上伊那から工業科をなくさないよう希望が出されました。箕輪工業高校PTA保護者から、高校改革は理解できるが、時間をかけて総合学科や多部制・単位制をよく調べて欲しいと希望が出されました。

パネルディスカッションがありまして、コーディネーターを北沢PTA連絡協議会会長が務め、中原駒ヶ根市教育長、小牧上伊那農業高校教諭、原赤穂中学校教諭、それからこちらにいらっしやいます藤本推進委員が、パネリストを務めて行われました。

会場からの発言の中には一般論として、多部制・単位制は工夫次第で魅力的なものである。学校減は避けられず、2校統合することは、後退ではなくて魅力ある高校づくりのチャンスである、という声もありました。また上伊那に独立した工業高校を残して欲しいとの声もありました。上伊那農業定時制を残して欲しいとの、保護者の声もありました。

コーディネーターはまとめとして、拙速の議論にならぬことを、推進委員会と県教育委員会に要望しました。ほぼ3時間に及ぶ学習会でした。

以下資料説明

高校教育課野村主幹教育支援主事から説明 【説明内容省略】

(池上委員長)

ありがとうございました。今までのところで何かご質問ございましたら。よろしゅうございますか。

それでは、次に、県内外の学校にそれぞれの委員の皆さんが、ご視察を継続してお願いしてございますので、その結果についてご報告をお願いいたしたいと思いますが、最初に静岡の中央高の視察について藤本委員、ひとつお願いいたします。

(藤本委員)

静岡中央高校については、プリントも出ておりますし、それから委員長さんからも報告があったと思いますので、時間も短時間ですので要約して、ダブル点があるかと思いますが報告します。

まず、校長先生から多部制・単位制についてこんな発言がありました、「現在の学校制度になじめない生徒の制度」、また「ガチガチの学年制が不登校生をつくっている、そういう生徒を救っているんだ」と。それから、「特定の能力を伸ばしたい生徒、生涯学習を望む、そのような生徒に非常に対応出来ている」と。それから、184名の科目履修生ですが、非常に子どもたちにいい刺激を与えていると。そのようなことで11講座を250から300名の生徒が、生涯学習として学んでいるということでした。生徒自身は生涯学習講座は取れないようだけれども。

それから科目数が104、講座数が500程度ありまして、工業、商業、家庭科といった科目も用意している。Aというのは午前部で389名、Bは午後部で265名、Cは夜間で580名で、ほぼ20名を超えない程度の講座で行っているということでした。

それから、授業担当者を公表しているので、生徒が先生を選ぶということで、そういう点でもお互いに良くなっているんじゃないかということです。

216名が春季の募集でしたが、そのうちの約120名が新卒者、約100名が転入編入者で、半数が長欠者であると、この長欠者が年々増加しているということです。

受験生は500名を当初超えていたが、現在は280名程度に落ち着いており、この理由は、各学校で中退者がだんだん減っているというのが、ひとつの理由とのことで、それが1番大きいようです。ただ、その結果として受験者の層が、だんだん変わってきて、長欠者がなかなか入れなかったが、だんだん入れるようになってきたと、そのようなことをおっしゃっておられました。

スクーリングについては省略します。

それから今年の春ですが、179名卒業したが、1年で卒業した人が5名、2年が26名、3年で102名、4年で28名、5年で13名、6年で3名、7年で2名ということで、3年の卒業者がかなり多いようです。

気になる中退、退学ですが、新規の中卒者では約52.5パーセント、118名中の62名、中退者に関しては37.3パーセントの卒業率であったと、この辺の退学率が最大の課題と、そのようなことをいっておられました。

新設校ですのお金もかかっておりますし、車いすの方が3名ばかりおられ、エレベーターを利用しており、そういう設備面でも非常にお金がかかっている。さらに静岡県の場合は平成5年に静岡中央高校を新設したが、次は平成18年に浜松、20年には三島ということで、長野県よりは中学の生徒数が、5割から6割多いところですが、計画的に、順繰り東、中、西といったところに、3校設置していると思いました。

さらにちょっと注目したのが、2校目が全日制との併設で、これについては校長先生も、まだ課題もかなりあるので固まっていないと、これから議論したいと、そんなことでしょうか。ちょっとまとまりませんでした。よろしくお願いします。

(池上委員長)

ありがとうございました。それでは新田暁に熊谷委員お越しいただきましたので、よろしくお願いします。

(熊谷委員)

すみません、昨日報告しろという話が来たもので余りまとまっておりませんが、よろしくをお願いします。

新田曉につきましては、平成 8 年に総合学科に転換したということで、ちょうど 10 年だということでございます。

転換前は、普通科と食品工業科と電子機械科、電子科ということで、非常に幅広くと、書いてございますが、種々雑多な学校運営をしていたなあという感じであります。平成 8 年に転換したわけですが、正直言いまして、私の感触としては、いろんな変遷を経てきて、どういった学校を作っていくのかいろいろ迷って、総合学科ということにチャレンジしたんじゃないかなあという感じがしました。

総合学科に改変した後も、実は系列ということで 6 つの系列を設けているわけですが、人文科学、自然科学、情報ビジネス、社会福祉、食文化、機械電子技術という 6 つの系列ということで、これだけ幅広く設けることが、はたして高校としては存在感としてはあるのかなあという感じもしたわけであります。

10 年間運営してきて、それなりの成果はあったというふうにいわれておりますが、普通の高校運営かなという感じで、見させていただきました。特に総合学科にすることの重要性ということよりも、学校運営のひとつの形態として選択して、現在もひとつの形態として運営されているという感じで、見ていたところでございますので、特にこの新田高校の実例から、長野県にこれを反映した学校が必要かどうかという、ちょっとクエスチョンだったというふうに思っております。以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。それでは太田フレックスに、行かれました小林委員、お願いいたします。

(小林委員)

事務局から簡単と言われましたので、藤本先生みたいにあんまり詳しくはできませんが、よろしくお願いいたします。

「フレックス」という会社でよく使っている言葉でも、ピンとくると思いますが、多部制・単位制の学校で、出来たばかりの学校でありました。太田西女子高校と言いましたかね、その普通科を転換したわけですが、一方ではその女子高校と併存した形で運営されている姿もわかりました。現在の女子高校の、その学校運営というか、それをかなり気を使いなが行っている、例えば、チャイムのことについても、気を遣っているということもわかりました。

それから、教室を見させてもらいましたが、長野県でいえば、まずしてくれないだろうと思いますが、完全に少人数に合わせた教室づくり、普通の教室というと、みんな 40 人から 45 人くらいのスペースの部屋が、どこの学校もほとんどだと思いますが、30 人以下くらいの、非常に小規模な落ち着いた教室を、幾つか見させていただきました。

ちょっと生徒の雰囲気を見ますと、一応服装は自由化だそうで、意外と群馬県では珍しいということをいわれましたが、いわゆる長野県でいうと筑摩高校みたいな雰囲気と違い、

生徒は非常に明るく学んでいました。われわれが行ったのは午後ですから、おそらく午後部の生徒だったと思いますが、英語の授業を見せていただきました。

それから非常に驚いたことは、まず生徒が玄関に来ると、玄関のところに電子掲示板がありまして、いろんな連絡がすべてそこに掲示されて連絡事項がすべてそこで確認する。いわゆる学級の教室というのではないわけです。それで見て生徒はすべて行動するというのをいわれました。

それで、私が一番苦になったのはそのことですが、生徒はいろいろ心配もあるだろうし、相談したいだろうし、どこに求めていくのかなということを聞きましたら、クラスはないが、ゼミ方式といいましたが、先生達が普通の学校でいうと担任そして副担任は一切なくしてゼミ方式で、1ゼミでちょっと人数ははっきりしませんが、5、6人から7、8人。とにかく少人数で出来ていて、その先生が、すべてその子どもたちの、生徒の責任を持って受けるということです。例えば家庭訪問したりなんてことを聞きましたので、これがクラスに代わることなのかなというふうに思いました。

それから校長先生も、先程藤本先生おっしゃったような非常に熱意を持っていて、もう今のような型をはめた教育はだめだと。この教育は、絶対子どもたちが伸びるという信念を持っていたことを強く感じましたし、それからこの学校を見て、本当に私は今までの多部制・単位制のイメージが、かなり変わったと思います。

もうひとつ、ほとんどの子が3修、つまり3年で卒業できる状況になっている。従って、午前部の子が午後に受けたり、夜間に受けたり、又は、午後の子が午前に受けたり、夜間に受けたり、それは全く自由に出来る。そういうシステムに成っているってこと、大変私は驚きました。

ただ、まだ出来たばかりですので、今後の成果というのはちょっとまだまだつかめないかなと思います。以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。それでは、笠原副委員長に塩尻志学館にお越しいただきましたので、よろしくお願いします。

(笠原副委員長)

はい、お願いいたします。ご承知のように志学館高校は、平成12年に総合学科として改変をしたといいますが、それまでは園芸経済科それから食品加工科、家政科、普通科を持つ学校だったわけですが、総合学科に転換をした背景には、普通科における進学率の低迷、あるいは普通科における将来の職業選択を、視野に入れた職業教育充実の必要性。それから、職業科における進学率と、進学志望の高まりに対する対応の必要性。さらには全体的な学習意欲の喪失と、不本意入学および学校不適用に対する対応。それから多様化する生徒の個性を伸張させ、生涯にわたって自己実現を図ろうとする態度をはぐくむ教育の必要性。こんなことが、総合学科に転換した背景にあったようであります。

教育活動の特徴としては、進路や興味関心に応じた内容、能力適性に応じた内容の科目選択が可能というような柔軟な科目選択ができる。それから習熟度別講座編成をしたり、グループ学習があったり、個別学習があったり、それから少人数講座があったり、異年齢

集団学習等の形態、そういった柔軟な学習形態が特徴のようであります。

それから体験、見学、研究、調査あるいは観察、実験、実習、ボランティア活動、就業体験さらには討議、事例と発表といった、そういう能動的な学習態度が養われる工夫がされているようであります。

さらに学校運営については、単位制あるいは選択履修、2学期制、チームティーチング、キャリアガイダンス、こういった学校運営も非常に柔軟な形で、行われているようであります。

設置系列は人文科学、自然科学、国際文化、芸術コース、環境科学、食品化学、生活福祉、情報ビジネス、この8系列がありますが、この系列というのは科目選択の目安であって、系列を生徒達が選択するのではないということでした。

いろいろと相違ある教育の取り組みがなされていますけれども、志学館独自のものとして、サポーターの教育支援体制の導入というのがありました。これはどういうことかというと、ホームルームとは別に、正副担任以外に、生徒1人ひとりに興味関心および進路に応じて、全職員が生徒の自分探しと自己実現の旅を支援するシステム、こういうものだそうであります。

そういうことの成果であるといっておりましたけれども、進路状況を見ますと、第1期生は4大、短大、専門学校含めて74パーセントの進学率だったものが、第3期生になりますと、これが84パーセント。ことに4大への進学率が非常に顕著だそうであります。キャリア教育の結果、進学率の増加につながった。こういうふうにおっしゃっておられました。

科目選択については、進路実現に必要な科目は、たとえ人数が少なくても開講するということで、また1対1という授業もあるそうであります。従って教師の負担が結構多くて、今後は、校務の効率化とゆとりの喪失というようなことが、課題だというふうにいわれておりました。

施設見学もさせていただきましたが、特に印象に残ったのは、200人収容の階段式の講義室、それから介護実習室、コンピューター室こういったあたりの充実が、非常に印象に残りました。

簡単ですが以上であります。

(池上委員長)

ありがとうございました。それでは松本筑摩(松本筑摩高校)に丸茂委員お越しいただきました。よろしくお願いいたします。

(丸茂委員)

はい、よろしくお願いいたします。松本筑摩高等学校は、現在、全日制と昼間定時制(昼間の定時制)と夜間定時制、それから通信課程という体制を取っている学校です。

まず、松本筑摩高校が多部制・単位制高校への転換を求められているという点で、昼間定時制のことについて、主に質問して参りましたが、第3通学区から松本筑摩高校に通っている子どもですが、高速バスがある関係でしょうか喬木村や伊那からも通っている、諏訪地区からは岡谷、上諏訪から通う子どもがいるというお話をお聞きしました。

太田フレックス高校や静岡中央高校のように、意欲的に取り組んでいらっしゃるという

感じではなくて、全体的に学校の先生方が、淡々として子どもたちそれぞれに、落ち着いた感じで、対応いらっしゃるというのが印象的でした。それは中学校時代に不登校を経験した子どもたちが、主に希望して通っている学校であるという所が、このような対応の所以なのかなと思いました。

1 学年が 80 名募集で、17 年度は 80 名の新入学生について、昼間部は、入学時の 60 パーセントが不登校経験者だそうです。その 3 分の 2 の子どもたちが、学校生活に適應するようになってきているということ、それからだいたい毎年定員を満たしている、というお話でした。

修了の期間ですが、3 年修了を目指す子どもがやはり半数以上いるようです。昼間定時制は、午前中だけの授業で、3 年間で修了することは難しいようです。そこで、午後、特別授業を行い、3 年間で修了できるような編成を組んでおられるようです。だいたい 1 クラスが 20 名の少人数であるということと、ホームルームはありませんが、それに似た組織をつくっているというお話でした。

全体的に受けた印象ですが、校長先生方は、現在の体制から多部制・単位制ということに、それほど大きな変化がないので、全日制の方は募集停止になってしまうということがありますけれども、それほど抵抗がなく、移行していけるというようなお話でした。以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。これから議論となります多部制・単位制の設置、それから総合学科の設置というところで、それぞれご視察をいただきましたので、ここで特にご質問がいただければありがたいと思いますが、いかがでございましょうか。

それでは、またこれから議論をする中で、ご質問やご意見を拝聴したいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。それでは、いよいよ結論に近いところの議論に入っていきたいと思いますが、よろしくお願いしたいと思います。

本日は、前回までの結論で、それぞれのチーフから、その検討結果を、ご報告をいただくということに相成っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。順序でございしますが、7 区、8 区、9 区という方法で、順序でお願いしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

それでは 7 区からよろしくお願いいたします。

(笠原副委員長)

はい、それでは 7 区からお願いをいたします。

7 区のグループ会議は、2 日にわたって行われました。その話し合いの結果ですが、結論から申し上げますと、泣く泣くではありますが、岡谷東高校と岡谷南高校の統合という結論であります。

しかし、諏訪地区の委員の意見は県が南信地区全体をみる中で策定した、たたき台にはなかった諏訪地区が、なぜ 1 校減らさなければいけないのか。県が案を示さないのに、われわれ委員が案を出す権限はないのではないのか。あるいは現時点では 1 校減は必要ない、学級等の増減で対応できるのではないのかという、こういった 1 校減を疑問視するような意

見がずっと出ておりました。グループ会議の大半はその議論で終始したような実情であります。学級数を確保しながら、ある程度の規模を維持することが、学校の活性化面にもつながり、お互いに切磋琢磨することで、レベルの向上や維持を望めるといった、そういった前向きな意見も、もちろんあったわけです。

とはいっても、各地区1校減というのは、この推進委員会での決定事項でもありますので、諏訪地区の再編についても、今議論することは平成31年以降に生きるという認識のもとで検討を下しました。

候補案を策定するまでの経過でありますけれども、前回の推進委員会で地域高校は存続という決定をされていますので、富士見高校についてはそのままとし、1市町1校は維持するという原則を持って、茅野高校と下諏訪向陽高校を再編案から、除外をしたということであります。むしろ、諏訪地区で一番人口の多い茅野市にはもう1校あってもいいのではないかという意見もありました。

職業高校については、諏訪実業と商業、岡谷工業、それに富士見高校の農業も含めて諏訪地区にはバランスよく配置をされているので、これも対象外ということであります。残るは、諏訪市の清陵と二葉、岡谷市の岡谷南と岡谷東の普通科高校ですが、清陵と二葉は、統合するとしても、どちらの校地も山際で狭い、こういったような理由から除外せざるを得ないということであります。

そこで、最終的に絞られたのが、岡谷東と岡谷南の統合ということですが、両校のジョイントからという意見もありましたが、この際、一気に統合したほうが、将来を考えるといいのではないか、こういうご意見であります。いろいろな問題や課題はありますけれども、地理的な条件等踏まえながら、岡谷で考えざるを得ないという結論に至ったわけであります。

われわれの統合についてのイメージというのは、現在の岡谷東は、コース制で総合コース、健康スポーツコース、進学コースと、こういったコース制をひいておりますし、岡谷南は、特色学科の英語科と、文系、理系の類型をもった全日制の普通科でありますので、両校の特色を生かしたコース制の新しい高校をつくるというイメージで、今までの2校とは別のもと考えていきたいということであります。

今、お配りしましたプリントに、例として挙げてありますが、さらに、高大連携や、産学連携、地域との連携、そういったことも視野に入れての、新たな学校づくりができればと、考えております。いずれにしても、県民、市民、あるいはそれぞれの学校の同窓生にも、納得してもらえるような学校に、なってほしいとの願いをもった、苦渋の選択であります。

ただ、このような再編が進んだ場合に、新たに高校を志す子どもたちが、どういうふうな学校へ流れていくか、というようなことを考えた場合に、ことに茅野高校については、今後、県の強力なるバックアップの元に、イメージチェンジといえますか、改革が必要だというのが、委員みんなの認識であります。その辺もご理解いただいて、推進委員会での検討にゆだねたいと、こういうふうに思います。

もし他の地区の委員の先生方、補足がありましたらお願いしたいと思います。以上であります。

(池上委員長)

ありがとうございました。そういう最後のくだりのところでございますが、いかがでございますか。よろしゅうございますか。

大変、苦渋の選択であるということは、よく理解をいたしておりますので、この結論をいただきましたことに敬意を表したいと思います。また委員会で慎重に検討いたしたいと思います。ありがとうございました。それでは、8区についてお願いいたします。

(小林委員)

それでは、一応私がまとめて発表をということでしたので、第8区上伊那部会の、結論についてお話を、させていただきたいと思います。

ちょっと、3校もあって申し訳ございませんが、できるだけ簡潔にはしたいと思いますが、ちょっと時間がかかるかもしれませんがよろしくお願いします。

この、資料を作る前提ですが、5つ、上伊那では考えました。

1については、もうご承知の通り1校削減、そして3通全体で総合学科高校、または多部制・単位制高校、1校設置ということでしたので、その線で検討してきたわけですが、その場合にどうしても必要なのは魅力ある学校づくり、それと、地元が少しでも前向きに受け止めてもらおうと、この2点をうんと大事に考えてきまして、特に県のたたき台をどうするではなくて、全高校を対象に検討してきました。

3つ目として、その場合にわれわれが結論に持っていくための、ひとつの条件ですが、これは別に部会だけのことでなくて、その前のことも含めてですが、全高校の学校経営状況の理解、それから総合学科高校および多部制・単位制高校の理解と視察、それから地元関係者との接触、これはいろいろな方法があるので、ちょっと具体的なことは言えませんが、意見の調査、収集などを元にして検討を重ねてきた結論が、下の1校削減案と多部制・単位制転換による試案であります。ちょっと時間がかかりますので、経過については省略させていただきます。これは、あくまでも基本構想でありますので、ご意見があればさらに修正して、より良いものにしていきたいと思います。

それから最後ですが、この試案の対象高校が、たまたま県教委のたたき台と一致したわけですが、決してそれを意識してやったのではなくて、あくまでも(2)・(3)を大事にしてできたものであります。

まず1校削減案ですが、基本構想は箕輪工業高校の、全日制、定時制を廃止して1校削減としました。設定理由ですが、総合工学科があるが、近隣に上伊那からの志願も目立つ工業高校、これは岡工(岡谷工業高校)のことですが、これと競合するということ、もうひとつ、やはり近隣に普通科が数校ありこれも競合すると。それから、3つ目に定時制も多部制・単位制が近隣に設置されれば、廃止しても影響は小さいのではないかと。それから、4つ目ですが、全科廃止した場合、上伊那の中で言えば比較的その影響は小さい、影響があることはもちろん間違いありませんが、という理由で、このように今考えているわけがあります。地元との折衝結果については、後のところで一緒に説明したいと思います。

次に、再編試案ですが、これはさっき言った、上伊那で総合学科高校または多部制・単位制高校の設置が可能なのかどうかということを、検討した結果がこれ以下であります。

まず基本構想ですが、全日制、定時制を廃止した箕輪工業高校を、多部制・単位制に転

換することです。それから、全学科単位制とするが、3 修を原則とし、多部受講も可とすること、それから、多部制の構成ですが、1 部、午前部ですね、これは総合工学科、1 学級。それから、ちょっと名前が紛らわしいですが、総合学科が2 学級。それから2 部を、午後部としまして、これは普通科、1 学級。従来の定時制の代替ということで、考えております。少人数になっております。3 部が夜間部、これは普通科、これも1 学級。夜間学習を希望する生徒、社会人ですが、これも当然、少人数にはなっております。

それから設定の理由ですが、まずひとつとして、この学校は定時制が、ただ設置されているというのではなくて、他校にない、私も前にちょっと触れましたが、全日制と定時制の連携体制が非常に進んでいて、全日制の先生が、ある年数を経れば定時制に行って、定時制の先生が、ある年数を経れば全日制に行っているという、こういうことをかなりしっかりやっているというのは、あまり私は、他校ではちょっと聞いていませんので、多部制・単位制に転換しやすい素地があるのではないかと思います。

2 つ目ですが、この学校はかつては活気のある学校でありました。これは私も、実は、この地元の中学にいましたので、実際にそれは知っております。いろいろその後の事情で、なかなか第一志望で当校を、希望する生徒が少なくなってしまって、関係者は水面下ではかつての活気のある高校復活のための改革を求めているということです。

それから3 つ目ですが、上と関連しまして、近くに伝統校の岡工（岡谷工業高校）が、あるということで確かに、ここの総合工学科は競合していますが、上伊那の工業事情、これは先ほども、そういう要請があったわけですが、県下2 位の上伊那の、しかも工業は上伊那の北部で核になっている、といっても過言ではないということから、どんな形でも工業科は存続すべきだと。

4 つ目ですが、ここは上伊那、諏訪のほぼ中間に位置するので、通学面でも適切な地域にある。下伊那にとってはもちろん適切ではないわけではありますが。それから、総合学科高校は、当校についても他校についても、検討しましたがなかなか条件が、満たされなかったということでもあります。

それから、3 番の地元との折衝結果、これはあまり具体的な事は、ちょっと差し控えますが、かなりいろいろな方々の意見を聞きながら進めてきました。当初はご承知のように40,000 人の署名が出て、もう絶対反対という動きがあったのですが、一方では本当に、ただ反対しているだけではまずいということで、少しでも改革というような動きもしてきたので、いろんな形で接する中で、それぞれのご意見もお聞きしながら、つくり上げたのが今回の案であります。当然、別に地元と合意してつくったものではありませんので、今後いろいろと修正しなければいけないものもあると思いますが、基本的には、なんとかこれだと思っております。私もそうですが、皆さんも1 校の命運を左右するようなことを決めなければいけない、ということについては非常に重い気持ちで、今も発表しているわけですが、そんなことをご理解していただきたいと思っております。

それから、最後に設定の留意点ですが、これは、こういう形で作ったので説明が必要かと思っておりますので、少し説明をさせていただきます。

まず1 部、午前部の総合工学科についてですが、多部制・単位制の良さを生かすために、工業科としての再編は今後検討する必要があるということです。機械科1 本にするか、電気機械科とか、地域工業科とか、それはいろいろあるわけですが、これは、駒工のほうで

もそういうことをいっておりました。しかし、総合工学科が、産業界の現状にあったものだとなると、これを残すべく、やっぱりPRをもっとしっかりする必要があるのではないかと、それがひとつです。

2 つ目ですが、単位制であるのでガイダンス、これはキャリア教育といってもいいと思いますが、かなりの力を入れて午後の授業、もちろん夜間もそうですが、受講可とする。これは、他県でも例があるというのは、さっき言った太田フレックスでございます。この場合、専門教科はできるだけ午前に、一般教科は午後に配置するといった点が望ましいかと思います。

(ウ) 一方ではデュアルシステムという、ちょっと私もこんな名前を使っていいのかどうか分かりませんが、簡単に言えば体験学習、実地学習です、これをすごく大事にして地域の協力を得て、教室外のこれらの学習を保証して単位として認め、個性的な生徒にしたい、

もうひとつの午前部、総合学科のほうですが、まず、2 学級の総合学科というのは、私もなかなか苦しいなとは思いますが、志学館(志学館高校)のことを考えると系列は3 つが限度かなと。他県でも例があるというのは、ちょっと聞いた話ですが、私がまだきちんと調べていませんが、今後検討したいと思います。従ってコース制ではないということです。

それから、(イ)として、午後の授業も受講できるようにして、進学希望生のための選択科目も設定したいと、それから(ウ)として、さっきいった総合工学科同様に、デュアルシステムを重視して、午後において3 系列の実地体験学習を望む意欲的な生徒に応じたい。

仮に総合学科設置が困難であっても、総合学科の要素はぜひ残したいというのが です。

3 番。午後部、普通科ですが、従来の定時制の生徒の受け皿としたいので少人数になるだろうが、上伊那の定時制を全廃した場合は、現在以上になる可能性もありますが、私がいろいろ接している限りでは、赤穂の定時制廃止はちょっと無理かなと思います。その場合でも不登校生が志願するなどの状況から考えて、従来通りの少人数教育はなんとか維持したいわけです。これは、いろいろな方とお聞きして、一緒に私も本当に深刻に考えてしまっているわけですが、今の不登校の子どもたちのかなりが、軽度発達障害の生徒が非常に目立つということです。これは、私も現場の子と接していてつくづくそう思います。従ってそういう意味でも少人数教育は、なおさら必要かなというふうに思います。

それから(イ)ですが、従来定時制は機械科でしたが、それでは女子生徒は希望しないので普通科ということです。それで多部制・単位制の午後部の設置は実際、どこもなかなか難しいようでありますので、それで生徒指導上の得点も考慮し、午前 11 時から受講できるようにしたいと思います。これは、石川県にちょっと名称が不明確ですが、金沢にも例があるということです。

それから(エ) 従来の定時制のように夜間設置にすると、不登校の生徒に夜型生活を変えにくい、ということで午後に設置したということです。現状では、初めから就業希望の生徒は極めて少ないということも考慮してあります。

最後に夜間部、普通科ですが、これは一番は、生涯学習の立場で学習を希望する社会人、外国籍の生徒、社会人、それから中退生で学習の必要を感じて再入学を強く希望している、そういう社会人を主として受け入れたい。従ってそうすると、従来の定時制とは違った教

育課程、例えば、ポルトガル語のできる先生を配置するとかいうことが必要になるかなと思います。

それから、次にやはりこれ確かフレックスだったか、暁だったか、どちらか記憶がちょっと不十分ですが、託児所を設置しているということも考えると、このようなことも含めて、配慮する必要があります。生涯学習に関わる方を受け入れるというのは、かなりのことをしていかないといけないかなと思います。

しかし、さっき言った中で、どうしても昼間働きたいという方も、今後出てくるということがありうると思いますし、それから、いろいろな事情で、午後ではなくて夜どうしても、そういう不登校生もいるだろうから、この門戸は開けておきたい。従って、こういうふうに、配慮してもそうは集まらないだろうから、少人数に力を入れたいと思います。

全体的なことですが、まず（ア）ですが、学級は今まで全定合わせて5だったのですが、そうすると、これで言うと、現在この学級数が5となって、今の全定を合わせたものが4ですから、1学級増となりますけれども、今までの全日制工業科の教員とか、加配教員もいるようですので、これを調整すれば、そんなに財政負担はないだろうし、それから施設については、総合工学科は以前、機械科と電気科があったわけですので、以前は2学級です。施設面ではほとんど増設する必要はない。

もちろんいろいろと、出欠のコンピューターを配置したり、いろいろな経費増はあると思いますが、太田フレックスみたいにすると別ですが、そうでなければ、それほど負担はないだろうと思います。

それから、午前部と午後部、夜間部の受講生と、重なったほうがいいのか否かは、ひとつ今後の課題です。それから、学級形態も志学館（塩尻志学館高校）のようにするか、太田フレックスみたいにゼミ方式にするか、ロングホームルーム。これは確か新田暁だったと思いますが、このようにするかは、今後検討の必要があると思います。

それから、もうひとつ問題になるのは、生徒会、それから部活動をどのように進めていくか、これもかなり検討が必要かなと思います。あと付け加えをよろしくお願いします。以上です。

（小坂委員）

今の部会の報告ですが、ここまで細かくやったわけじゃなくて、あくまでこれは小林試案でいいですね。

部会で委員長も、ここまで細かい検討はしておらない。それで、箕輪工業高校について、多部制・単位制にする。しかし、全体的の中で必ずしもこれが一本ではなくて上伊那の場合、ほかでの動向を見ながら、さらに検討をしていくということ。小林さんそういうことだね。ですから、こういう細かいことはここで、委員長決めなかったよね。

（池上委員長）

そうですね。まだ、ええあの…。

（小坂委員）

そこだけ。念を押して。

(池上委員長)

ありがとうございました。それにしてもですね。7区同様苦渋の選択がありまして、可能性として幾つかの内容を多岐にわたって検討したということでございますので。

(小坂委員)

上伊那農業の定時制について一言も触れませんでした。やはりそれはちょっと触れておく必要があるのではないですか。

(池上委員長)

では、その小坂委員のほうからご発言をお願いします。

いいですか。そういうことでございましたので、上伊那農業の定時制については、先ほどの赤穂高校については、困難性が高いというご発言がございましたのですが、上伊那農業については、基本的に他の学校に混合高校で検討をしていただきたいと、こういうご意見でございましたので、つけ加えをいたします。

これも大変難しい問題が、山積をいたしておりましたが、そういう方向で全日については、箕輪工業高校という方向で結論を得ておりますので、よろしく願いいたします。それでは、9区ひとつお願いいたします。

(岡庭委員)

それでは、第9区についてご説明しますが、今、7、8区、推進委員会でかなり詰められた形でお話が合った分けてございますが、私どものところは、若干言い方が違いまして、南信州広域連合の連合長の諮問委員会で、「南信州地域の高校未来検討委員会」という委員会を設置して、そこで、一応県教委からのたたき台に対する、南信州広域連合としての対案を、準備していったらどうかというのが狙いでありました。

たまたま、その状況の中でこの推進委員会で、旧通学区で、1校ずつ全日制を削減するということが出されましたので、併せてという形、推進委員だけで話をしてどうこうというのではなしに、この検討委員会の中へこの推進委員会の方向もお出しして、そして一緒に検討していただいたらどうか、という方向で進んでおります。

37人の各界の委員の皆さんがご参加いただきまして、この検討委員会を設置してきておるわけでございます。3回の委員会をやりまして、いまだ結論に至っていないというのが実態でございます。基本的には、旧通学区ずつが、全日制1校ずつ減らすということであるならば、これは受け入れて議論をしなくてはならないのではないかとというのが、検討委員会の考え方でございますが、先日は南信州広域連合の議会が開かれまして、議会の議員の皆さんとすれば、まず1校はありきで議論は、われわれは許すわけにはいかないというな、議論もございましたから、検討委員会の結論がどうなったかに、よってではなしに、南信州広域連合としての未来検討委員会の対案としてどういうものがでてくるかということについては、これは今のところ、私が確定して言うことができないということでございます。

特に、推進委員会の皆さんの議論と違いまして、一般の住民の皆さん、工業会の皆さん、あるいは同窓会の皆さん、PTAの皆さん、さまざまな皆さんが30何人集まっておるわけでありまして、さまざまな意見がでまして、私も池上委員長に大変申し訳ないのですが、

これだけのいろいろなさまざまな議論の、住民の議論のある中で、推進委員会が1校削減で、高校名までだしてやらなくてはならないのかと、そういう責をわれわれは追っていないと、こういうことができないと今、私は感じておるわけでございます。

それはどういうことかと言いますと、高等学校改革プランに対します、住民の皆さんの関心、願いというのは、実は今の高等学校の学生の状況、学力の問題、生活の問題さまざまな問題を見て、これでは困る、次の世代を背負って立つ高校生の皆さんが、こんな状況で困ると、何とか高校生が本当しっかりと勉強して、しっかり生活態度がして、あるいはしっかりとキャリアに対する意識を、持って育ってほしいと、いうのがすべての願いでございます。その願いの中で、高等学校の学校削減ということで、この問題が果たしてクリアできるのかどうかと、もっと違うところで議論すべきではないかというのが、前提として一般の皆さんの意見であったと思っております。

それから、もうひとつは、飯田、下伊那地域については、高等学校の配置については、地域的にも大変バランスのいい配置になっており、これを再編、削減する必要があるのかどうかということについての意見が出ております。

もっと、現在の廃止の中のことで、どうしたらやはりいい高等学校教育が、できるのかということ、まず考えるべきではないかと。その中から結論を出すべきではないかというのが、もうひとつの意見だったと思います。

それから、もうひとつは、多部制・単位制高校の問題がでました。確かに、結論的にもでているわけだし、全日制の1校削減という中で、多部・単位制高校の問題が出ていますけれども、8校残すために多部・単位制高校ひとつに、代替したらどうかという、そういう議論もあるわけでございますが、実は多部制・単位制高校について、今この議論されているのですが、長野県教育委員会としては、こういう多部・単位制高校を考えている、というものがあるのか、そういうイメージが具体的に定義されるものが、あるのかどうかということについて、なかなか多部制・単位制に議論を進めていく、数合わせの議論としてはあってもですね。なかなかそのところで、議論を進めていかないということでもあります。

これは、この検討委員会の中では定時制高校に代替するもの、多部・単位制高校と考えられるわけでございますが、箕輪工業高校に多部・単位制高校をつくった場合は、飯田、下伊那いわゆる県のたたき台だと、総合学科をつくった下伊那農業高校と長姫高校のところへ定時制高校を、残していくのではないかとされているわけでございますから、この点について、本当に一致した展開へとなるのかどうか、ということについて、非常に考えていく上で、イメージがわからないというのがあります。

定時制高校には、多部制・単位制高校といった場合は、多部・単位制高校というのは先ほどからお話を聞いてもいますが、かなり生徒の自主的な考え方や、自発的な学習意欲に支えられていくというのが、前提になっているのが多部・単位制高校だということも思うわけでございますが、学力に対してごく困難な児童とか、そういう子どもたちは定時制でかなり、規定の制限ある教育を受けることによって、教師との関わりによって辛うじて学校生活を、維持しているという子どもたちに、果たして多部・単位制高校というものが代替できるものになるのか、ということについて非常に疑問が残ると。このことについては、県教育委員会に対して私どもの検討委員会として、質問を出さしていただき、これはガイ

ダンスによってなんとかなるのではないかと、というふうにお答えいただいたわけですが、どうもそのところでまたちょっと、納得のいけるところとなっていないということでございます。

もう一点は、総合学科高校についての評価の問題でございます。総合学科高校の問題についても、冒頭から実は高等学校教育をかなり長くおやりになった委員の方から、総合学科高校に対する疑問が、まず出されて参りました。総合学科高校は、成果を上げて、全国的に成果を上げていないのではないかと、問題は専門教育の部分が、非常に軽んじられ、そして進学高校化して2流、3流の進学高校をつくると、そういう方向へ動いていかざるを得ないというところに来ているのであって、本来総合学科高校が狙っているところへは、いってないのではないかと意見が出されました。

そういう点で、教育界の内部において実は地教委も含めてですね、総合学科高校というのは「こういう高等学校を狙っているのだ」と。「こうなったらこういうことになるのだよ」というのはやはり、教育会内部においても、総合学科高校の評価というのは、一定の評価を受けているのかどうかということについて、非常に大きな私どもは疑問を抱いたということでございます。

そういうことから考えると、やはりすぐに、ここですぐに、即座に結論を出すということなどは、大変無理だと、そういう非常にあいまいな部分が残っていること、無理だというのが私の考えでございます。

今日、竜峡中学校のPTAと皆さんたちの要望者にでています。私と川島委員が実は竜峡中学校のPTAの学習会に行って参りましたが、PTAのお母さん、お父さんに声をそろえて、19年度実施なんてことは無理だと、子どものことをもっと考えてくれるのなら、もっとゆっくり考えてほしいという要望があったわけでございます。これは、前提としてお話を私としてはしなくてはならないと思っておりますが、そういう点で、9区としては全日制1校削減するとすれば、1校を多部・単位制高校に替えるか、あるいは今、飯田、下伊那には農業科、それから商業、工業、土木科、それから建築科、家政科という専門学科があるわけでございますが、専門学科はこの学科として残すという形での再編を考えました。それは、組み合わせということについては、いろんな組み合わせ案がでておりますが、今のところその組み合わせを、どこの組み合わせというわけにはいかない、ということでございます。結論はまだ至っていませんが、一応専門学科の組み合わせの中で、1校削減ということも考えざるを得ないのではないかと。その場合は専門学科を、学科を存続する。ただ総合学科にしても、この前藤本さんがおっしゃったように、農業科と商業科は残した総合学科高校を、つくるとかですね、あるいは飯田工業高校と長姫高校を統合するとしては、専門学科として存続させるとか、という方向で考えていったらどうか、ということでございます。まだ結論はでてないというのが実態でございます。

ですから今、話し合いのプロセスについてお話をしたと同時に、これも全く私の、私見でございますが、今お話しすると苦渋の選択とかいろいろお話ございました。推進委員とすれば、それはやむを得ないだろうと思うわけでございます。冒頭で私、お話ししたように、たたき台はなんでもかんでも推進にすることではないと思っておるわけございまして、極端なことを言えば、推進委員会で一致なく、1校ずつ全日制高校を減らそうということが確認されたとすれば、その上に立って、県教育委員会がではどういうことで

考えるかと、考えていただくということであって、われわれが、学校名までが出たりする必要が、あるのかどうかということについては、非常に疑問を感じているということだけは、申し上げておきたいと思います。後、川島、熊谷委員で補足をよろしくお願いします。

（池上委員長）

岡庭委員ありがとうございました。どうぞ補足してください。

（川島委員）

ただいま岡庭委員が発表されたように、まだ高等学校の未来検討委員会としては、成案という形にはなっていないということです。雰囲気といたしましては、多部制・単位制高校を誘致したいというのが比較的割合としては多い意見。現状としては意見であるという感想を持っております。ただいま、旧第8通学区のほうで、箕輪工業というお話がでしたが、箕輪工業の最寄りの駅の木下駅から、1時間というJRの時間考えますと、七久保あたりで止まっちゃいまして、下伊那まで入ってこないという実態がございます。その関係で、多部制・単位制高校というものにつきまして、従前教育団体等でも、飯田、下伊那にぜひ1校ほしいという要望を出してきたことから、なんとか通学可能な範囲で、多部制・単位制高校を設置していただきたいという要望で、そういった意見が多かったと認識しております。

それから、それが受け入れられない場合として、専門高校の統合といったようなことも考えざるを得ないのではないか、というあたりで議論止まっていると。組み合わせとしていろいろなご発言、ご意見ありますがどれが多いというところまでは、まだ行っていないという状況だと思います。

（熊谷委員）

今川島委員さんの言われたとおりなのですが、私どもの思いでいきますと上・下伊那で333人が現在定時制に在籍しているわけですし、やはりそれくらいのボリュームがあれば1校設置する意味もあるだろうということで、そうすると上・下伊那というスパンで、設置について多部制・単位制については考えていただきたいと。諏訪の課題があるわけですが、恐らく交通事情からいくと、十分松本が通学可能範囲になるのではないかと、というような視点でぜひ訴えていきたいなということです。ですから、未来検討委員会につきましては一応次回12月2日に開催するようになっておりまして、今日の推進委員会の報告等見ながら南信州としてどうしていくか、という方向から進みたいということでございます。よろしくお願いします。

（池上委員長）

ありがとうございました。各委員のご意見もこれから拝聴したいのですが、その前に私の言葉尻で、岡庭委員のほうからお話があったのですが、大変難しい選択をお願いしているわけですが、前回の議論の折りに1区1校減ということにつきまして、具体的にお話をちょうだいできるという認識で議論を進めて参りましたので、さすればいろいろな問題があるにしても、今後のスケジュール等考えていきまして、いつごろまでにその結

論がいただけるか、ご意見としての結論をいただけるかを、まずお聞きをしたいと思いますが、いかがでございますか。

（岡庭委員）

個人的な考え方と、検討委員会の考え方で若干違うだろうと思います。

個人的には私は、長野県が第 4 通学区一斉で、「用意ドン」で総合学科ひとつつくろうではないか、多部制・単位制高校ひとつつくろうではないか、というこの議論は余りにも乱暴な議論だと思っています。

特に各地域、例えば第 3 通学区においては、地域高校を残していこうということからいうと、バランス的に考えればもう何年かは学校を減らさなくてもいけるわけで、このところ、1 校削減ということが前提で、われわれ認めた 1 校削減を前提にしてもっと、住民議論やいろんな議論を重ねていって、方向を出していても遅くはないだろうというのが、私のひとつの考え方でございます。

ですから、私とすれば早急に具体的な学校名を出して、19 年までに 1 校削減を具体的にすることについては、反対でございます。そこまで県民のいってみればコンセンサスは絶対取れないだろうと思います。

推進委員会は義務を感じていますから、何とかということをやりますが、では本当にこの推進委員会の案が住民の皆さんのところへ入っていったときに果たして、その問題で支持されるのかどうかということについて、非常に疑問が多いということでございます、全国的に考えてみても、一斉に「用意ドン」なんてとこやったところは、ほとんど私の知らないではないということですから、これは「用意ドン」は無理だと、ということだと意志をひとつ持っています。

南信州の未来検討委員会で、まだ 3 人でお話していませんが、2 日に今日のいわゆる皆さん達のお話しを受けて、どういう形にするのか、ということで決めていきたいと思いますが、37 人の委員の意識とすれば、1 校削減ということも前提である程度結論を出して、同一步調で望んでいかななくてはならないのではないかとございしますから、7、8 区の様子も見させていただきながら、方向を出していくということになるのではないかと考えていますが、できるだけ検討委員会では、学校名が出るという形で努力を、私はしていきたいと思っていますところ です。

（池上委員長）

期日をおっしゃってください。もう 1 回。

（岡庭委員）

一応 2 日には、そのような形で思っておるわけですが、それもちっととよく分かりませんが、2 日には一応私としては議題として出したいと、今日の様子を見てですね、そう思っています。

(池上委員長)

ありがとうございました。それから、委員長がこの発言をするのがいいかどうか、迷うところありますが、もともと本日というお約束でやってまいりましたので、そのところはそれ以上申し上げませんが、ぜひよろしくお願いいたします。

いずれにいたしましても、では話を元に戻しまして、またスケジュール上対応していきたいと思いますが、何はともあれですね、元に戻して話を戻しますと、まず高校改革プラン検討委員会からの最終報告がございました。これにうたっている内容と、それから第3通学区自身の問題を、どうするかという問題でありましょう。

それから、次にその中で総合学科、多部制・単位制をどのように配置するかと、こういう問題になっていると思いますので、そのところは旧来のヒストリーを、ご承知おきをいただいてぜひご検討を、いただきたいと思います。

(小口委員)

では、多部制・単位制の議論というよりも、それぞれの地区を1校廃止するということをまずやって、というのが今までの話の流れだと解釈しております。

(池上委員長)

もちろんそうですね。そういうことで、今の話ですと、2日に結論をいただけると、こういう認識でよろしゅうございますね。

(岡庭委員)

具体的学校名を出せるか出せんかについて、私今のところ37人の議員の合意ですから、その様子を見て3人の委員がどのように判断するかということで、決めたいこう思っております。

しかし、今のお話のようにこの通学区の推進委員会で全日制1校は、生徒の削減やいろんな諸般の情勢から考えて、削減するという形で議論をしていくということについては、全く私は、異論はない。その話は19年までに実行削減ができるのかどうかということについては、私としてはまだ結論に至っていないというのが実態でございます。

これはやはり、私の考え方というより、私ども取り巻いた状況の考え方の中で、そこまでするのかどうか。特に竜峡中学のPTAの、見ていただいてもわかりますが、実際に子どもを持っている親たちが、迷っているわけですし、もっとゆっくりやってほしいと、みな願っているわけです。多分上伊那の学習会はそうだったと思うし、私が関係するいろんな会議ではほとんどみんな、分かったと。子どもたちが、数が減っていくということはわかったが、もうちょっと時間がほしいという議論がかなりあるわけですから、このことについては、具体的校名を出すということについて、私としては、じゃあ責任をもって何日までにはいたしましようというわけには、今日ここでお話するわけにはいかないということでございます。

(池上委員長)

そういう内部事情はよく私もわかるのですが、では、この委員会としては「この学校の方角で行こう」という結論をつけるとした場合には、いかがでございましょうか。

(岡庭委員)

多分これは、ここから私も今も話しとったくらいで、いたのですけれども、全体の流れの中で私としては判断さしていくぐらいないだろうかと、こう思っておるわけですし、われわれも実は市町村の、いわゆる自治体の代表としては、私も参加させていただいておるわけですから、例えば松川高校、多部・単位制高校といった話といった場合におけば、松川町の住民がどう考えるのか、松川町の町長がどう考えるのかという議論、そのところがないと、私としてはそれについて、結構、個人の資格でここに私は参加していると思っていないので、そのところだけはいいいというのにはご容赦いただきたいとおもっておるところです。

(池上委員長)

では、14名のうち13名同意をいただいても、1名「私は意見が出ない可能性があります」というお立場ですね。

(岡庭委員)

そういうこと。そういうこと。

(池上委員長)

それにしても、2日の日には何らかの結論をいただけるということですね。

(岡庭委員)

いいですよ。それはもう。

(池上委員長)

そういうことでよろしいですね。というのは、同じ状況のお立場の議論をどの地区も困難な中で、議論をいただいてまいったと思いますので、それを、完遂をしていかないと、この議論は進んでいかないと、このように思っております。今の小口委員の心中を察しながらでも、いうところでございますけれど、そういうことだと私は考えておりますので、特に下伊那からそういうご意向も強くございましたので、そういう方向も、それは客観情勢がそうなったのでしょうから。それでよろしいと思いますが、そういうこともございますので、ぜひ2日の日にはご提出をいただきたいと思います。

できればその前に、2日の前に、何らかのご意見がちょうだいできれば、さらにありがたいなというふうに考えておりますので、よろしく願いたいと思います。

それでは、いろいろまたご意見を、ちょうだいしたいわけでございますけれど、ここでちょっと休憩をさせていただきたいと思います。この時計で11時5分までお休みをしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【休憩後再開】

(池上委員長)

それでは、時間がまいりましたので、よろしゅうございますか。

では再開をいたしたいと思います。先ほどまで各区のそれぞれのご意見を拝聴したという段階でございますので、特に 9 区につきましては、2 日までに完璧に結論が上がるかどうかということがありますが、とにかく結論をいただくと。委員会としては、私はそう思っておりますので、そういう方向にいたしたいと考えていますが、関連して他の委員から、今の議論についてのご意見を拝聴いたしたいと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

(熊谷委員)

岡庭村長さんがお帰りになっちゃったので恐縮なのですが、岡庭村長さんは行政のトップという立場もございまして、なかなか歯切れよくしゃべれない部分もあるやに聞いていましたが、南信州の場合 16 の行政があるものですから、その意見集約を行政の立場でやるというのはなかなか難しい面があるというふうに思っております。

ただ先ほど言いましたように検討委員会 37 名の委員の中の、特に民間の委員を中心に 1 校削減の流れというのは認めざるを得ないんだということで、ほぼ方向性が出ておりまして、それについて具体的にどうするんだという議論も、相当詰まっておりますので、2 日にはぜひまとめて次回に望みたいというふうに思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

(池上委員長)

それは、どの学校が候補に挙がっているということというのは、お漏らしいただけますか。

(熊谷委員)

先ほど、岡庭村長がちらっと言いましたが、上下伊那を対象にした多部制・単位制高校を展開したいというのが、一応の候補案では出ております。

(池上委員長)

今、先ほど川島委員のほうから、そのこと自身が不可能だとすれば、総合学科に近い形態でというご発言に受け取れたのですが、その点はいかがでございますかね。

(川島委員)

未来検討委員会としましては、総合学科については先ほど岡庭委員が発言されましたように、非常に否定的なムードが強いということがあります。ですから専門高校の統合というような選択をするにしましても、それはそれぞれの学科を残すと。

ただほんとに学校を統合することだけにとどまれなくても、専門学科は残すと。半分を総合学科にして、半分は専門学科を残すといったような、両コースあるような高校といったようなイメージを多くの検討委員は抱いていると認識しております。

ある高校2校を統合して、その高校を総合学科、丸々総合学科に転換するということについては、恐らく否定的な形になると認識しております。

（池上委員長）

私のイメージが、よくわからないのですが、今まで提案されております学校の形態とすれば何に属するのでございましょうね。

（川島委員）

従来どおりの専門高校で、ただ例えば3校が2校になるとか、そういったイメージですね。

（熊谷委員）

5クラスある学校とすれば、2クラスが総合学科で3クラスが工業科と土木科と建築科。そういう専門学科になるという、そんなイメージの議論をしているということです。

できれば総合学科なしの、専門学科。専門高校3校あるのを2校にして学科としては、今ある学科を残すというイメージがされているということであります。

（池上委員長）

要するに、総合学科を否定しているということですね。そういうことなんですね。

私が委員長として、こういう発言をするのはどうかと思いますが、まず多部制・単位制のところは、できるだけ地区の中央位置にもってきたほうがいいんじゃないかと思います。諏訪を除外して上伊那と下伊那というご発言は、ちょっとおかしいんじゃないかなと思いますので、地理的な条件を考えてそういうところじゃないかなというふうに思っております。

それから総合学科の問題でございしますが、それはもともと答申を受けているわけですが、それについてはそういう形態で適当な地域にというのは、志学館と当地域（飯伊地区）ということになりますと、勢い南部ということに相成りましょうか。そういうところに県としても、かなりの投資をして、いい学校をつくっていくんだという志向でございしますので、あまり否定的に考えるより、それをどう活用して、その地域を活性化するかとか、その地域の教育をよくしようかとかいう方向にお考えいただくほうが、私は賢明じゃないかと思うのです。

でも、ちょっと議論が違ふところに行っちゃっているんじゃないかと私は思って、ある意味じゃ憂いておりますし、その案を持っていても県はほんとに採用するかどうかなというところも、考えなければいけない問題だなというふうに、その地域の皆さんがいくらおっしゃっても、やっぱりこれはこうすべきだという委員会の結論に持っていかなければいけないんじゃないかなというふうに、今は思っております。

(藤本委員)

ちょっと委員長さんいいですか。

地域の合意が一番大事であって、委員長は県教委がそれを採用するかどうかご心配のようですが、今いろいろのところからたたき台が出てきて、諏訪もほとんど全員反対なんだけど、苦渋の決断というか、泣きながら出したわけなんです、やはりここがスタート点だと私は思うんです。

やっとスタートしただけであって、諏訪はそういう組織ができておりませんし、飯田はあるにしても、上伊那も先ほどいろいろな方のご意見を伺ったと言われましたが、どんな方から伺ったかは、お話がなかった、やはり地域の合意、さらに該当校の、そこには専門集団としてこの学校をよくしたいと思っている先生方もおられるので、そういう合意が欠かせない。

そうしてみると、県教委が採用してくれるかどうかじゃなくて、ぜひ地域の合意を大事にして、これからがスタート点でやっていただきたいと、私は思うわけです。

それで岡庭委員さんが、さき程言われたことに僕は賛成なんです、これは議論が戻ってしまうので、もうたぶん愚痴を言うだけだと思いますが、この検討委員会への依頼事項の中の学校数というのは、「目安」と書いてあるんですよね。資料4です。そのほかの総合学科と多部制・単位制は「設置する」なんです、学校数については「目安」と。

それで第1回、第2回のときには、目安だったら、3が2になろうが、1になろうが0になろうがいいだろと、委員会でだいぶ議論したんですが、県教委は目安なんだけど、これは非常に重みを持っていると。重みの程度によって違うんですが、そういうことでやって来たんです。

結果的には、1、1、1というふうになってしまったが、この辺の数がどうしても先行して、県教委の土俵の上での議論になっちゃっているわけで、いまさら戻することはなかなか大変なんです、やはり19年度一斉というのは、先ほど岡庭委員さんが言われたが、もうこれはほとんど無理で、私も情報を出したいと思いますが、他県のいろいろな情報を見ても、第1次高校改革を計画し、その様子を見て次は第2次高校改革、その様子を見て第3次高校改革と、そうやって計画的にやっていたわけです。

この間、12月末という期限について、吉江課長にワンワン言いましたら、1月中旬になりました。さらに「もしまとまらなかったらどうするのか」「もっと2月、3月、4月はどうか」と伺ったら、吉江課長さんは「議論の成り行きによって」と答えられたことを、私は覚えておりますので、そんなに急がなくても、地域の合意、それからやっぱり該当校の方々の合意を。私は地域の該当の方々の合意があれば、大賛成なんです。委員長さんの先程の言葉「地域の合意より」がちょっと気になったので、発言しました。

(池上委員長)

すみません。地域の合意を得ようとして、そういうふうに行ってきましたので、そういうご発言がございましたので、それを軽視するという立場ではないのですが、客観的に見て、それは大丈夫ですかということを申し上げたいと。

ほかに問題がいろいろ後ろで内在しているんじゃないかなということを、憂いているわけです。

（熊谷委員）

総合学科の議論の中で、委員長さんは発言されましたが、志学館にしても新田暁高校にしても、全国の例を見ても、普通科と専門学科との組み合わせによる総合学科という考え方が非常に根底にあると思うんですね。

しばらく今直面しているのは、専門学科だけの高校を総合学科に転換するという方向性でどうなんだという議論があるので、その中では専門学科は専門学科としての特色を下伊那としては守っていききたいと、そういう議論なわけなんです。

（池上委員長）

そこはあれですね。「×学校」ということか、「×学科」ということか、そういう議論なんですか、それは。

（熊谷委員）

先ほど川島委員も言いましたが、最終的な方向でいきます議論の中のひとつとして3つある専門高校を、仮に削減するとすれば学科は残していきたいという議論であります。

（池上委員長）

そういうことですね。学科ですね。

（小口委員）

先ほどほかの8区、9区のお話を伺いまして、ちょっと7区はまじめすぎたかなと反省をしているんです。

実はほかの地区に比べて、各区を1校減ということで来ているんですが、その話が始まったのが、諏訪地域は9月にありまして、そういう意味ではなかなか民間、あるいは民意の盛り上がりが一番少ない、先ほど藤本先生もおっしゃいましたが、そういうことが一番危惧するところであります。

やはり高校改革だから、やっぱり減らしていかなければいけないということはあるんですが、高校改革だからというよりも、現状動向を見ると、そういう方向だと思うんですが、やはりそのことによって地域の学校がよくなったということにしなければいけない。

そのためには、やはり地域の人が学校に関心を持って、より学校をよくするという方向に持っていかなければいけないと思います。諏訪地域は議論の中で、そういう方向付けをしたわけですが、やはり諏訪地域の人にも納得していくためには、例えば多部制・単位制の話もありますけれども、多部制・単位制をプラス1ですから、どうしても例えばマイナス1校したけれども、プラス1だったら、そこはゼロだという話に、どうも地区ごとになってきます。

だから、ぜひ県のほうには、例えば箕輪工業が多部制・単位制になった場合には、それぞれだいたい何クラスぐらいできるので、何クラスぐらいになったら、それぞれの学校のクラス数で見ると、7区、8区、9区のバランスとしてどうなのかということも、やっぱり示しながらやっていかないと、諏訪地域もこれはまた納得しにくいという部分がありますので、ぜひそんな部分も示していただきながら、議論をしていけばなと思います。

(小林委員)

お願いします。

最初に断っておきたいのですが、さっき小坂市長さんがおっしゃったこと、私はよく聞こえなかったもので、何か誤解されていやしないかなと、ちょっと心配なんです、この案はあくまでも上伊那部会の案であります。

あくまで試案ですから、もちろん今後変更は当然あり得ると思いますし、それぞれの学校についてはさらに検討はしてあると思いますが、それはもう前提の上での話ですので、誤解のないように、よろしくお願ひしたいと思います。

ひとつ、何かちょっと行き詰まっているようですので、少し「こんな方向で」ということを提案したいわけです。とにかくこの部会が設置されてきた、ここの一番原則をもう一遍確認する必要があると思うのですが、さっきから委員長さんがおっしゃっているように、各地区1校削減ということは、いろいろ意見がありましたが、とにかくそれで行きましようということできたから、そのことを結果的には地域が受け入れないことは、当然あり得ると思うんですよ。

でも、ここの推進委員としては、その線に沿ってやっていかないと、何のために今までやってきたか、ほんとに私は疑問に思うわけです。それで、ただもうひとつ総合学科と、多部制・単位制については、私は本来は全体で考えてやったほうがいいかなと思っていましたが、実際に上伊那でこういうものをつくった場合に、ただ機械的に真ん中へつくればいいのか、そういうことではとてもできないということを、私はうんと痛感しております。

従ってやはり部会でほんとうに総合学科なり、多部制・単位制は、それぞれ部会でも今後検討して、仮にかち合ってもいいというぐらいに、私は考えております。ほんとにその地域で、多部制・単位制がこの南信で2つできたとしても、それはほんとに地域が求めているものなら、どうしても多部制・単位制1、総合学科1と、そんなにこだわらなくてもいいんじゃないかと思ひます。

ただほんとに総合学科というものをうんと理解された中で、やっぱり進めていかなければいけないなということはもちろんですが、どうも機械的にこの真ん中へつくればいいのかいうことでなく、ほんとにこの多部制・単位制というのは、地域と密着して受け入れていく体制がなければ、私は絶対うまくいかないと思ひます。

だからやはり今後も部会で、さらに検討されて、それで総合学科が2つになったり、多部制・単位制が2つになるのは、結果的にはやむを得ないぐらいにして、できるだけ調整はもちろんしていったほうがいいと思ひますが、どうしてもここで、どこにするかということをもたやっちゃうと、よく事情もわからないところで、機械的に決めるとまたうまくいかないということも思ひますので、やはり多部制・単位制、総合学科については最初からここで決めなくて、もう一遍それぞれのところでうんと練って、これなら地域も受け入れそうだとするところまでやらないと、やはり私はここでやった意味がないと思ひています。

ですから今回はぜひ、今後もそういうふうにつけて、その上で調整するならするという方向に持っていってもらわないと、ちっとも検討が進まないと思ひますので、今後はそういうふうにしていただきたいと思います。

以上です。

(池上委員長)

今のお話ですが、小林委員のところはかなり議論が進んで、いろいろ隘路(あいろ)はあっても、そういう方向で考えたらどうだろうという地域の意見もなから集約された方向で考えておりましたということですが、特に9区についてはそういうお考えが強いというふうに伺いましたけど、そういうご議論がなされていたのかどうか、ちょっと伺っておきたいと思いますがいかがですか。

(熊谷委員)

「そういう議論」というのが、ちょっと見えないですが。

(池上委員長)

今、小林委員のほうから、内容についてかなり踏み込んだ検討をしていただいて、多部制・単位制「かくあるべし」と。それは逆に言うと、上伊那の委員もそのところまで逐条的にいうところはあるかもしれませんが、少なくともそういう議論が深められて、それでそういう提案がなされたという、ある意味じゃまじめな話ですが、そこはいかがでございましょうね。

(熊谷委員)

下伊那では実は、多部制・単位制については4・5年前から、この間吉江課長からお話がありましたが、教育7団体の陳情という形で県教委には多部制・単位制設置という話はしてきておりますので、多部制・単位制の内容については地域としては一応、充分理解した上で設置していこうという議論をされているという認識をしています。

(池上委員長)

熊谷委員としては、いかがでございしますか。

(熊谷委員)

私もわかって話はしているつもりであります。

(池上委員長)

失礼ですが、川島委員、いかがでございしますか。

(川島委員)

私の一応、今年の立場としましては飯田下伊那PTA連合会の会長という形で、下伊那教育7団体の連絡会議の議長という立場でございします。そういった立場からしまして、先日も多部制・単位制高校、せめて分室を何とか飯田下伊那へ設置してもらいたいという陳情を、県教委にした手前もございしますので、ぜひ飯田下伊那に多部制・単位制高校を設置していただきたいと、私の希望でもございします。

(池上委員長)

なるほど、わかりました。

そうすると、どこかの学校を転換しなければいけないと。全日を廃校して、どこかを転換するという具体的な案が挙がっているということでございますね。

それは、どういう案なのでございますか。

(熊谷委員)

一応案としては、下伊那の北部の学校を、普通科を転換することが下伊那としてはいいんじゃないかという提案で今、最初に進んでおります。それは、先ほど言ったように上下伊那を対象にできる範囲ではないかということです。

具体的には、そこまで言えばわかりますが、松川高校が転換可能かどうかという、認識はしております。

(池上委員長)

そういう案が、挙がっているということですね。

はい、それはわかりました。その総合学科については、どういう議論をなされているのですか。

(熊谷委員)

総合学科については、飯田下伊那としては、現在専門高校3校ある、工業、農業、商業という3校が配置されているという、意味を非常に重く受け止めておりますので、総合高校を転換して専門学科校をつくるということについては否定的な議論であります。

(池上委員長)

総合学科を。

(熊谷委員)

いや。専門高校を転換して、総合学科にするということについては、否定的な議論です。専門高校が3つあるということの意味のほうが、総合高校を設置するよりも、意味があるだろうということです。

比較論ですが。総合学科高校をまったく否定するわけではないけれども、現在ある3校を転換して、総合学科にするくらいなら、専門高校として残すことが必要だろうと。

例えば箕輪工業にしても、普通科と工業科という配置ですよ。ところが飯田の3校については、全部専門学科だけなんです。下伊那農業高校にしても、長姫高校にしても、飯田工業高校にしても、普通科は併設されてないんですね。

そういう意味での専門高校が3校がある意味は、重いという議論です。それをあえて総合学科高校に替える必要性は現時点ではないという議論であります。

(池上委員長)

そうすると、逆に最終報告書あたりから、適当な学校の大きさという規模の問題があるのですが、そのあたりとは逆行するというお考えですね。

（川島委員）

現在長姫が4クラス、工業も4クラス、下農も4クラス、合計12クラスですので、3校合わせて6クラスの高校を2つ、適正規模の6クラスの高校を2つつくという意味では、適正規模としての要望は満たしていると考えております。

（池上委員長）

要は5.5から6クラスというところの、最終報告に。

（川島委員）

1校減らして6クラスの学校が2つできるという。

（池上委員長）

1校減らしてね。それが、松川であるということですか。関係ないでしょ。

（川島委員）

「統合するとすれば」ということ。

（池上委員長）

統合するとすればですね。

そうすると、簡単に言えば統合して実業高校をつくろうということですか。

（熊谷委員）

案として、3校を2校に統合した場合でも、実業高校を2校にしたいと。総合学科校ではなくて、実業科の高校を2校にする案もあるということですよ。総合学科校という選択はしていないということです。

（池上委員長）

なるほど。くどくお聞きするのは、結局先ほど小林委員ではないですが、総合学科をとにかく設置するかどうかという議論があるんですが、その良しあしをこの3通としてどうするかという、いよいよ議論だと思うんです。ほんとに多部制・単位制、この3通に例えば2校ですかという議論はおかしいんじゃないかなと、私は思っているものですから、あえてそういうことをお聞きしているんですが。

（熊谷委員）

下伊那は別に多部制・単位制を3通に2校配置すべきだという議論をしているわけではありません。ただ、地理的な条件からして諏訪から飯田までをカバーするということは物理的に不可能だとするならば、上下伊那を対象とした多部制・単位制という視点はどうで

すかという議論であります。

（池上委員長）

すみません。私とやり合っても仕方がない。
ほかの委員の皆さん、いかがでございますかね。

（北原（曜）委員）

多部制・単位制を松川という案が出ているというお話でしたが、高校の統合を考えると、すごく重要な視点があるかと思います。それはまず一番大事なのは生徒の教育の機会均等だと思うんですね。

就学分野が保証されていると。工業高校、農業高校、商業高校、それから普通科と。それが選択できる、結局通学時間や、交通費、距離、そういうようなものがちゃんとどこの地区も保証されている、教育の機会均等が保証されているということは一番大事なことだと思うんですね。

2 番目としては、将来ともその生徒の学力を伸ばす、そういうあるいは向学心を引き出すという魅力ある高校であるという。それからもうひとつは、統合した場合に地域の影響を最小限にするということだと思いますが、もし松川高校が変換するということになれば、松川町と特に大鹿村ですね。そのあたりからの人は、大変困るんじゃないかと思いますが。

それはちょっと調べさせてもらったんですが、松川とか大鹿の出身者は、特に大鹿村はそうなんですが、松川高校に集中しているわけですね。交通の便を考えて、そりゃそうだろうと思うんですが、そういう地域地域の生徒の学校選択の自由、それを損なわないように検討していただきたいなと思います。

（池上委員長）

ご意見はございますか。

（熊谷委員）

下伊那という広大な地域でありますので、その辺はじゅうぶん配慮して検討しているつもりでございます。大鹿村は、確かに松川に近いというイメージはあるかもしれませんが、今の時代になれば、松川へ出るのも飯田へ出るのも、そんなに大鹿村の住民にとっては、変わりはないと私どもは認識しています。

事実私どもの農協も、すでに一郡一農協なもんですから、大鹿の支所から本所へ来るという機会は当然ありますが、そういった部分での飯田下伊那として一体的な地域形成がされていると思います。

例えば今大鹿の話が出ましたが、例えば南信濃村から阿南高校が多いかといえば、決してそうじゃなくて、今はもう矢筈トンネルもできたりしていますので、飯田方面への通学が圧倒的に多くなっていますし、そういった地理的なバランスというものをじゅうぶん配慮した上で論議はしていると認識はしております。

(池上委員長)

それは、先ほどおっしゃっていた3校、要するに職業学科校を3つを2つにするという話と、松川の話と、それはどちらがその重みを持って議論されているんですか。

(熊谷委員)

当然、第一の議論としては松川高校を多部制・単位制に転換するというのが第一候補ということで、議論はされております。当然です。

(池上委員長)

まず先に、先ほどの話ではないですが、「全日制のどこをいったい対象にするんですか」という議論のところは、どのようにお考えですかということが先なんですね。

(熊谷委員)

ですから、全日制の普通高校は5校あるんですね。そのうちの2校は地域高ということになっております。あと残るのは3校なんですが、当然飯田と飯田風越は中心部にありますので、郡内からの通学可能であると考えれば、松川高校を転換するというような議論はされていると。

(池上委員長)

いや、転換じゃなくて、「どこを廃止するんですか」という話なんですよ。

(熊谷委員)

だから、松川を廃止するということですね。

(池上委員長)

それが、案であるということなんですね。

(川島委員)

すみません。補足といいますか、第一希望として松川高校の多部制・単位制高校の転換を言っているのであって、松川高校の廃止と、専門高校の3校のうちの1校の廃止とで、どちらを優先させるかの議論はまだ、未来検討委員会ではできていないというのが実態です。

(池上委員長)

なるほど。そうしますと、2日あたりは、2日までにはその議論が詰まってきて、ここにご提示いただけるという立場でよろしゅうございますね。それでいいんですね。

今のところは、どちらかわからないが、そのうちの案のうちで出てくるだろうというふうに認識していいですね。

(小林委員)

いいですか。

あまり下伊那ばかりで申し訳ないですが、ちょっと意見を発言させていただきたいわけ
です。

こないだの新聞では、松川が受け入れそうということで、ちょっと受け止めました。し
かし、うんと疑問なんです、私らもこうやって多部制・単位制については、かなりいろ
いろ調べたんですが、その全体の検討の中で、多部制・単位制というものが、本当にかな
り理解されて、1校設置が一番多かったでしょうか9区でもそういう議論が進められたの
かと思います。

ということは私がうんと疑問なのは、仮に松川へ持っていった場合に、松川というのは
全日制一本やりにきている学校ですから、定時制も何もないですよ。こういう学校にい
きなりこういうものをつくって、本当に成り立っていくのかという、そういう経験者もい
ないというようなことを考えると、非常にちょっと疑問なんですよ。

だからどこかへということはいいいんだけども、本当に地域にどう根付いていくのか。
今まで地域のいろいろな要素の中で、どうなのかという議論がされなんでいくと、非常
に厳しいなということを感じるんですよ。

それからもうひとつ、これは私の思い付きで申し訳ないですが、例えば松川高校とい
うのを、総合学科にするというのは、まったくないわけですかね。ちょっとその広域連合で
すか、それが何で松川、多部制・単位制、こういう案があるのかという、その辺がちょ
っと理解ができないですよ。

ちょっとその辺を教えてください。

(川島委員)

まず魅力ある高校づくり的な総合学科と、多部制・単位制というものの理解といいます
が、受け入れやすさといいますか、その中では、先ほどから申し上げているように、ど
この学校ということではなくて、多部制・単位制高校誘致という前からあったと。

それに対して、未来検討委員会の中では、総合学科というものについての否定的なも
のがあるということです。だから別に松川を総合学科にという、そういう議論も出てこ
ないといえますか、総合学科をどこかに誘致したいという発想が、そもそもあまりないとい
う自体になっています。

(笠原副委員長)

いいですか。

当初から、やっぱり各地区で1校削減という、そういう話で各部会がやっている中で、
どうもその下伊那あたりは1校削減という話がちっとも出てこないんで、議論はそれが先
にやっていただかないと、諏訪地区だって先ほど小口委員がまじめすぎたと言ったように、
そういうことであれば、諏訪地区だって引っ込めるという気持ちになってきますので、や
っぱり各地区1校削減という、そういう話の中で進んできていることですので、まず最初
にその部分をきちっと出していただきたい。

(吉江高校教育課長)

委員長さん、いいですか。

いろいろ、それぞれの過日までの推進委員会でお決めいただいた方向で。すみません、部会というよりは、お言葉替えさせていただきまして、部会というと要綱上のイメージがありますので、それぞれの地区に分かれての小委員会的なもので、ご検討いただいた内容を、今日お寄せいただいて、第9区につきましては、今いろいろ状況をお聞かせいただいた次第でございますが、一点だけ第9区において引き続いての検討ということでございますので、ひとつだけ、ちょっとご検討の材料にお入れいただきたいと思っている事項がございますので、申し述べたいと思います。

現在長野県下の普通科と職業科、総合学科の比率というのは、一応普通科が72.0、職業科が26.7、総合学科が1.4という比率でございます。この比率が、今現在、第9区が普通科が72、去年でいきますと71.9ですが、現状においてすでに65.8ということで、普通科の率は低い地域になっております。

それを仮に、今お話のございましたような、どこの学校とは言いませんが、普通科を転換という形になりますと、恐らくこの65.8というのが、55.3というような比率になってきてしまおうかと思っております。

そんな形も含めて、ぜひご検討をでき得ればお願いしたいと考えている次第でございますので、よろしく願いいたします。

(池上委員長)

はい、ありがとうございました。

関連していかがですか。意見は。

岡庭委員のおいでにならないところで、お二人にまたお話しするというのは、まずいいことにもなるんですが、2日には詳細は結構ですが、お答えをいただくという認識でよろしいですね。先ほどの副委員長のご発言は、皆さんのご意向を代弁していると思うんですが。それで、よろしゅうございますね。いいですね。はい。

今の吉江課長のご発言に対しての見解はいかがでございますか。もしありましたら、お願いしたいと思います。

(熊谷委員)

いえ、事実関係としてお聞きしたということだけだと思います。

(川島委員)

そういった数字的なものが背景にあるということは、じゅうぶん認識しておりますので、ぜひとも要望ですが12月2日には、県教委にもご出席いただいて、そういったあたりもご説明いただければ、幸いだと考えております。

(池上委員長)

いかがでございますか。

(吉江高校教育課長)

実は、夜間だということになりますと、ほかの所用がちょっと入っておりますが、4時から。

ちょっと、調整させていただきたいと思います。

(池上委員長)

ちょっと待ってください。

調整というのは、出席方ということでよろしいですか。

(吉江高校教育課長)

私が出席できない可能性もあるかと思しますので、いずれにしましても誰か出席できる前提で考えたいと思しますので、よろしくお願いいたします。

(池上委員長)

そうということで、またよろしくお願いします。

では藤本委員どうぞ。

(藤本委員)

ちょっと、資料を作ってきたんですがいいですか。

(池上委員長)

何の資料ですか。

(藤本委員)

普通科比率が出ているもので。後のほうがいいですか。

数値が違うのですか、それじゃいいです。

さっき、小林委員さんの発言があったんですが、さっき程も言ったように今、私たちはやっとスタート点に立ったという認識ですから、諏訪のことが問題になっていますが、各ブロックで1校減で議論していこうということになったわけですので、さっき程も言ったように各ブロックで、数よりは地域の魅力をいかにつくるか、高校教育のレベルアップを図るかというのが、最大のポイントで、例えば諏訪でもちょっと話題になったんですが、どこかに総合学科という期待も若干出ましたものですから、各グループ会ごとに、1校減を重く受けながらも、総合学科とか多部制・単位制など、全体の高校教育のレベルアップを、もうちょっと議論したら。

さらにそのときは、やはりスタート点に立ったので、やっぱり該当する学校、地域の方々に広く呼びかけて、そういう声を聞きながら、総合学科、多部制も含めて、その地域で魅力がどうなるかということ、もう一度地域の声を聞きながら議論する。

再度、そうは言っても多部制については調整が必要ですので、調整を次回あたりするのがいいんじゃないかと思えます。だからもう一度、部会で多部制も総合学科も1校減も地域の声を聞きながら検討する。

最終的に調整するのは、やっぱり総合学科ですから、確かに茅野も若干塩尻に近いが、総合学科という考えもあるので、その際やはり地域とか該当校の意見を聞きながらまとめるのがいいのではないか。

ここで、どんどん煮詰めても、諏訪の場合も、委員長さんから質問をどんどん言われても、一切答えられない。まったくのたたき台ですので。9 区の 2 人の方にこれ以上伺っても。

（池上委員長）

よく認識しています。

ほかの皆さん、いかがでございますか。ご意見は。

今の藤本委員のご意見は、大変傾聴すべき内容だと私も思っていますので、そういう方向に至るだろうと思いますが、その前に若干時間がございまして、それでも意見を出していただいて次回の参考にしたいというふうな認識は変わりませんから、ぜひお願いしたいと思います。

（熊谷委員）

全然、今までの話と関係なくなってしまうですが、よろしいですか。

（池上委員長）

いいか悪いかは別にして、発言してください。

（熊谷委員）

最後に、要望書についてですが。

実は、下伊那で進路指導主事の会合がございまして、県教委のほうから 19 年には下農なり長姫が募集停止になりますという話があったという話がございまして、まだ決まっていないことなので、現場も混乱するので、県教委のほうへ、そういう話が決まっていない段階では言うては困るということを言うておいてほしいと言われましたけど、一応そんな話

が。

誤解があるかもしれませんが。

（池上委員長）

それは、県の話ですね。どうぞ。

（吉江高校教育課長）

私どものほうで、そのようにぜひ説明をしてほしいというようなことは、一切申し上げておりません。たまたまた、今の状況ということの中で、場合によりますと進路主事の指導主事の方が、どんな発言を、どんな場面でされたかというのは、ちょっと確認がもちろん取れておりませんが、発言されたことかとも思いますが、私どもはあくまでも従来から申し上げておりますように、まったく決定事項ではないということの中で、情報としてはいろいろな情報が飛び交っているのが、これは反面事実でございますので、19 年におい

て何らかの動きが出てくるというようなことの中で、場合によればちょっといきすぎてしまったような発言があったかと思いますが、私どものほうで、一切そういうような指導をしているということではありませんので、ご理解いただきたいと思います。

（池上委員長）

よろしゅうございますか、はい。

ほかにございますか。

それでは、先ほどの藤本委員、少し時間を向こうへ伸ばせと。それに近いご発言ですけど、やんぬるのかというふうに思いますので、方向としては、まず今日のところでは各区で1校減を確認をしていただくと。それは間違いないことですので、これはもう結論を付けてあるわけですが、それをぜひお出しをいただくというのが、一番先の話でございます。

それから次に総合学科、多部制・単位制、この3通でどのような配置をしたらいいかと。それが一番効果的な教育であるかと、そういうところに入って、それからいよいよ各校、または各学科についてですが、魅力論に入っていきたいと、今後ともひとつよくお願いしたいと思います。

いささか時間がはようございますが、貴重な時間ではございますけれどもね。

（吉江高校教育課長）

すみません。先ほどの下伊那の関係数字で、ちょっと若干将来に向けての確定という内容ではありませんので、今、すみません、この場で私の発言を訂正させていただきたいと思います。

先ほど申し上げましたように、まずは下伊那地域が65.8ということで、いわゆる普職の比率でいきますと、普通科比率の低い地域というようなことは先ほど申し上げたとおりでございますが、今後の募集定員をどこに比重を置くかということにつきましては、ある意味仮にそうなった場合に、私どものほうでどう検討するかというような要素がありますので、仮の話としてはああいうような数字を申し上げましたが、それなりに仮にお話しいただきましたような格好になったからといって、イコールそういう数字に必ずしもなるということではございませんので、その点については訂正させていただきたいと思います。

結果としまして同様な形で、傾向とすれば、いわゆる職業科比率の高くなる傾向になるんではないかというような言い方に訂正させていただきたいと思います。

そんなことでございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。

ほかにございますか。

(藤本委員)

地域の方々の声を、くみ上げていくというのが非常に大切ですから、前回部会的なものができたわけで、原則は公開ですが、非公開もあり得るということで、そういう方針になったんですが、賛成が得られればいいんですが、たとえ非公開で、推進委員の皆さんが議論されたとしても、誰がどういう具体的な校名を発言されたか、やっぱり皆さん、ご心配されるのは心情的によくわかるのですが、秘密会でやられたとしても、その内容はできるだけ早く地域の皆さんに、プレスの方、報道関係の方に、記者会見か私もよくわかりませんけれど、できるだけ公表し、さらにどういう形がいいかわかりませんが、ホームページがいいかわかりませんが、地域の方々、いろいろな団体の方々に声をかけて、その方々の声をくみ上げる、我々4、5人だけのたたき台ですので、何かそういうシステムをつくっていただきたいと、そんな気がします。

非公開の部分については、私はある程度終わった段階で、できるだけ早い段階で、この推進委員会を待たない段階でも、どういう議論がされて、どういう方向性が議論されたか、オープンにすることが必要と思うんですが、その辺は委員長さん、いかがでしょうか。難しいでしょうか。

(吉江高校教育課長)

今、藤本委員さんから、そのようなご指摘をちょうだいいたしました、本日第7から第9まで、それぞれお聞き申し上げておまして、非常にそれぞれをおまとめいただいた委員さん方におかれましては、それぞれの地域において議論された内容を、事細かに的確にご発言をされていたのではないかと、私は拝聴させていただいた次第でございます。

ひとつといたしまして、それで足りるというご判断をされるのかというのが一点でございます。それとあともう一点としますと、結果といたしまして、それぞれの地区、第9区におきましては、若干なりとも動きは違いますが、第7、第8につきましては、それぞれ委員さん方の中のご判断でお決めいただいた内容でございますので、今、藤本委員さんからお話しいただいた内容も含めまして、それぞれ今後各委員会なりが開催された折、あるいは今現在までの間においての内容について、どういう取り扱いをするかというのは、それぞれの各地区の委員さん方のご判断に委ねたいという考えをもっている次第でございますが、いかがでございましょう。

(池上委員長)

それはちょっと、委員の皆さんの意見も聞いてみないといけないと思いますが、いかがですかね。

藤本委員のご発言をそのままだとすれば、それはもっともなお話だと思うんですが、要するに「こういうふうな意見を出したいと思います」というふうになるわけですね。結論ではなくて、「こういうふうな意見を持っています」と、こういうことなんですね。

(藤本委員)

過日長野に行って、県庁で行われた推進委員会にちょっとお邪魔して資料をいただくと同時に後ろで短時間でしたが、14の団体の意見発表を聞いたんですが、ああいうスタイルで、どういう方々をお呼びするかは別として、この場で行っては。下伊那、上伊那の方は、地域の方々の意見を聞いておられるでしょうが、私はまったくわからないし、諏訪の方々の地域のご意見を聞いたとしても、上伊那の方も下伊那の方もまったくわからないので、ここでそういう地域の方々の声を聞ける機会が第3通学区でももし時間的な余裕ができれば、設けられないか、そのようにふと思いました。

(池上委員長)

今の話は、ひとつの方法論として拝聴しておきたいと思います。ありがとうございました。

ほかにございますか。それでは、次回について事務局からご発言ください。

(野村主幹教育支援主事)

ちょっと早いですが、よろしいですか。

(池上委員長)

ご意見もないですから。

(野村主幹教育支援主事)

ありがとうございました。

それでは、次回の日程について申し上げますが、師走になりましてお忙しいところではありますけれども、12月4日日曜日でございますが、午前をめどにと考えております。また場所については決まっておりませんので、委員長さんともご相談の上、あらためてご案内申し上げたいと思います。

よろしくお願いいたします。

(池上委員長)

これは、大方の委員の皆さん、いかがでございますか。

私はちょっと気にしているのは、下伊那2日ですよ、一応。結論があって、私のほうも、少しいろいろ検討させていただきたいということがあって、もしほとんどフィックスされていればいいんですが、そうじゃないとすれば、若干調整していただければありがたいと思っているのですが。

(野村主幹教育支援主事)

内々には、今ご連絡を申し上げているところではあります。1名の方が都合が悪いというふうには伺っておりますが。

(池上委員長)

ということは、4日ということですね。

(野村主幹教育支援主事)

はい。

(池上委員長)

はい。

ほかに事務局から、ご発言ございますか。いいですか。

(野村主幹教育支援主事)

特に、事務局からはございません。

(藤本委員)

2回ぐらいは部会を持ちたいですよ。部会じゃなくて、グループ会ですか。変更もあり得るでしょうかね。

(野村主幹教育支援主事)

4日で調整させていただいておりますので、また諸部会のこととかは、また別のところだと思っていますし、また委員長さんともおわかりのように100パーセント詰めてあるわけではございませんので、調整させていただきながらということをお願いいたします。

(池上委員長)

今日は、大変厳しい、具体的なお話でございましたので、いろいろの思惑やバックグラウンドや、内へ入れながらいろいろご発表いただいたりいたしましたが、いささか支離滅裂な進行の部分のあったかと思いますが、お許しをいただきたいと思います。

それでは次回は、12月4日ということで、一応やらせていただくということにいたします。

大変今日はありがとうございました。